

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	With コロナ時代におけるアクティブラーニング・プログラムの開発				
研究組織	代表者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史
	研究分担者	所属・職名	関西学院大学・教授	氏名	菅原 智
		所属・職名	パルマ大学・教授	氏名	Andrea Cilloni
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史

講演題目
With コロナ時代におけるアクティブラーニング・プログラムの開発：会計学の講義を事例として
研究の目的、成果及び今後の展望
<p>本研究（取り組み）の目的は、オンライン、オフラインを組み合わせたハイブリットな仕組みで、学生の学習意欲（内発的動機づけ）を向上させ、How（どのように）ではなく Why（なぜ）を探求出来る学生を育てるプログラムを開発することにある。</p> <p>2022年度に行った講義内の要点は、コロナ禍でのハイブリット講義（オンラインと対面）を組み合わせる中で、如何に学生のモチベーションを維持、向上させていくか、という点にあった。特に会計学という特性上、学生の注意関心を引くためには教材、授業方式を含めた課題が必要になる。</p> <p>今後の講義の継続性（継続的に学び続ける力）を考えた場合に、自分で理解できたという実感を得ることも重要になる。講義ではそうしたことを念頭に置きながら、有価証券報告書という企業が出す財務情報に基づき、企業分析の活用、ならびに会計の基本的な仕組みについて学ぶことを意識した構成で行った。講義の教室は、感染対策を重視して、教室を二つに分け、オンラインで視聴している教室と対面の教室に分ける形で実施した。また濃厚接触者、感染者等の理由で参加できない学生に対してはオンラインでの参加も認めるなど柔軟な運営で行った。</p> <p>今回の教材はオンライン上でダウンロードも可能であり、手許にある PC やタブレット等でも容易に入手できるものにした。学生たちには一次資料の分析を行わせるだけではなく、事前、事後の学習を行い、その成果をグループで話合わせ、学生同士の相互的な啓発の機会を設けることを意識した。</p> <p>会計学総論、財務会計論、経営分析などの講義において、こうした構成にした結果のうち、ここでは会計学総論の結果に絞って報告する。まず、本講義に対する理解度を 5 段階で評価してくださいという質問に対しては、「理解度 1」とした人は 0%であった。最も多かったのは「理解度 4」で 63.4%、次いで「理解度 3」(17.2%)、「理解度 5」(16.1%)であった。この事から講義を通じて、「ある程度理解できた」という実感を得ることが出来たと思われる。また、会計学についての今の意識を聞いたところ、「興味がある」「どちらかといえば興味がある」と回答した人が合わせて約 7 割を占めていた。「この講義を通じて最も興味を持って聞いたことは何ですか？」という質問については、「企業、経済の実例の話が知れて、勉強になった」が 53.8%で最も多く、次いで「会計学の基本的な仕組みや理論を知れた」(48.4%)、「レポートに取り組む経験が出来てよかった」(38.7%)、「有価証券報告書、四半期分析の見方が分かった」(37.6%)と続いていた。こうした結果を通じて、講義全体を通じて、学生自身が成長の実感を持つことが出来たことが示された。</p>